

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 17 日現在

機関番号：32709

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520187

研究課題名(和文)音楽によるアウトリーチ及びレジデンシー活動におけるティーチングアーティストの役割

研究課題名(英文)Creating Educational Outreach Programs: the Role of Music Teaching Artists

研究代表者

大類 朋美(Ohrui, Tomomi)

洗足学園音楽大学・音楽学部・講師

研究者番号：80587999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ティーチング・アーティストは、社会に開かれた音楽活動を推進し、社会の様々な場面での協働の結び目になる役割を担うことができる。そのために、ティーチング・アーティストは、演奏を通して音楽の魅力を紹介するだけでなく、音楽と聴衆の接点をつくり、聴く人が個々に音楽との関係性を深められるような芸術教育を施すことが求められる。

具体的な手法としては、映像や人形などの視覚的補助を用いたり、手拍子、指揮、歌などのアクティビティーを取り入れたりして、インターアクティブパフォーマンスをする。

ティーチング・アーティストは、観客の聴く力を最大限に発揮できるような芸術的な教育を施すことを職能の大切な部分としている。

研究成果の概要(英文)：The role of the music teaching artist is not only to give a top level performance, but also to engage the audience (the learner) to a deeper and meaningful relationship with the music. Activities that teaching artists' use to enhance active listening experience include conducting, rhythm clapping and sing-along, all of which deals with the 'entry point' of the piece being performed. Showing images or scenery, puppets that represent characters of the music story also help bring about emotional meaning and the message behind the music. It is also a key issue to create an atmosphere where students are at ease to answer questions and raise their opinions in an interactive way. Teaching artists are professional arts educators who are willing to make new programs and arrangements to better fit the needs of the particular audience.

研究分野：音楽芸術学

キーワード：ティーチング・アーティスト アウトリーチ 参加型授業 即興演奏 プロジェクト型学習 インター  
アクティブ・パフォーマンス コミュニティエンゲージメント 芸術教育

### 1. 研究開始当初の背景

昨今は日本国内でもアウトリーチという言葉は一般的になりつつある。こうした動向に共なって、公共ホールでのファミリーコンサートやワークショップ、音楽大学や芸術系の学部や学科を持つ教育機関の地域社会と連携したコミュニティー活動、被災地支援ボランティアの音楽活動、NPOの芸術教育活動など、多種多様なアウトリーチが行なわれるようになってきている。

しかし、アウトリーチは本来、音楽家が日々築き上げている芸術的価値の高いものを享受者に提供するものだと考えるのなら、我が国ではアウトリーチの概念は普及したものの、活動自体はまだ発展途上の段階である。未来の音楽家を育てる音楽大学での実技中心とした、専門性は高いがキャリア意識が低い状況も起因していると考えられる。学生の中には演奏は卓越しているが、人と関わるコミュニケーション力が乏しかったり、反対に教育には関心があるが、音楽の実力は伴わないといった偏りが見受けられ、音楽教育者を志すものと演奏実技を専門とするものとの職能の分離傾向がある。

こうした背景を受けて研究開始当初、質の高いアウトリーチを実現するための課題として、以下を挙げた。

- 1)エンターテイメント的なプログラムではなく、芸術本来の意義を追究する。
- 2)慣習に捕われない多様な手法を駆使し、音楽家が伝えたい音楽のコアの部分を伝達する。
- 3)享受者との双方向的コミュニケーション(インターアクティブ・パフォーマンス)(\*1)をより多くする。
- 4)単発的ではなく、継続的且つ長期間なレジデンシー活動の発展的展開を求める。

### 2. 研究の目的

上記で掲げた課題に取り組むために、本研究は演奏家の立場から芸術教育普及活動におけるアウトリーチ活動の社会的及び、芸術的価値を検討し、アウトリーチにおけるティーチングアーティスト(「技術面を越えた芸術的な教育を施すことを職能の大切な部分として、積極的に取り入れているアーティスト」を指す)(\*2)の役割を明確化し、その技能開発を促進すると共に、我が国におけるアウトリーチ活動/レジデンシー活動の活性化を目的とした。

### 3. 研究の方法

研究者自身が演奏家でもあるので、本研究は国内外の先導的なティーチングアーティストの活動事例を調査すると共に、実際に同時期に展開するアウトリーチ活動に反映させ、ティーチングアーティストとしての手法を実践研究する二つのプロセスに組み合わせて進行させた。

欧米の先導的な活動事例としては、次の場

所を視察した。

・アメリカの大学(ジュリアード音楽院、マンハッタン音楽)、NETMCDO 協議会や大学音楽によるアウトリーチネットワーク C'MONにも参加)

・アメリカの教育機関、及び演奏団体等のティーチングアーティストティーチングアーティスト養成プログラム(ニューヨークフィルハーモニック教育部門、カーネギーホールの教育プログラム)

・ヨーロッパの大学(ハグ音楽院にて実施された「クラシック音楽の演奏家向けの即興演奏のプロジェクト(エラスムス)」、ギルドホール芸術院にて実施されたバービカンセンター主催のカンファレンス「Reflective Conservatoire」に参加)

全期間を通して、研究成果を研究者が展開している川崎市内の小学校や美術館、公共施設の他、養護施設でのアウトリーチ活動へ、フィードバックした。より長期的で、有効に機能するインターアクティブなアウトリーチプログラムを研究した。

### 4. 研究成果

#### I 概要

ティーチング・アーティストは、社会に開かれた音楽活動を推進し、社会の様々な場面での「協働」の結び目になる役割を担うことができる。そのために、ティーチング・アーティストは、演奏を通して音楽の魅力を紹介するだけでなく、音楽と聴衆(学習者)の接点をつくり、聴く人が個々に音楽との関係性を深められるような芸術教育を施すことが求められる。

例えば、曲の歴史的文化的背景を説明して、文学・美術といった他分野との接点をつくりやすくしたり、日頃の学習と音楽芸術とを関連づけたり、どのような理論的な仕組みが音楽にあるかを説明して、焦点を絞った聴き方を促すなどして、聴衆の感性、理性、想像力に働きかける。

そのために、どんなエントリーポイント(聴く人にとっての、音楽への入り口となるポイント)(\*2)を設定するかがとても重要になる。曲の背景、音楽の構成、作曲技法、曲想など様々な素材の中から、どの切り口が聴く人の興味をひき、どのようなインターアクティブなアクティビティを準備して、観客の聴く力を最大限に発揮できるようにするかを考える。その都度、プログラム内容、対象者とその年齢、場所や演奏時間などの、諸々の条件を検討する。(具体例はIIにて)

研究者は、2004年より持続的に多くの音楽仲間達と一緒に小学校や養護学校、美術館、公共スペース等に訪問し、音楽を届ける活動を展開している。コーディネーターや企画者の仲介がないので、演奏家自身が受益者と直接連絡をとり、プログラム内容は、臨機応変に内容を変容させながら創発的に展開する。

今年3月、リトルクラシック in Kawasaki

(音楽によるアウトリーチを中心に活動している研究者を代表とした演奏家グループ)のホームページを公開した。

(<http://littleclassic.jp.org>)このサイトにはこれまでの活動実績として、コンサートや芸術教育現場の動画を多数アップした。コンサートに足を運べなかった方々にも音楽会を楽しんで頂く同時に、未来のティーチングアーティストにアウトリーチの活動現場を実際の映像で観て、参考にして頂ければと考える。

## II 具体例

ここではコンサートや授業で実際、どんなエントリーポイントと用い、どんなインターアクティブコンサートを実践したかを、ホームページのビデオと照合させながら報告する。

### ① 参加型オペラ

シュトラウス

オペレッタ「こうもり」

(\*青枠内、ホームページにあるビデオのタイトル)

この公演は、全校生対象の音楽会だったので、低学年から高学年までの幅広い年齢層が楽しめるように、様々な要素からできているオペラを選んだ。オペラは、音楽以外にお話や台詞があり、歌手が振り付けや踊りをつけて演じ、衣装や舞台道具が彩りを加える。

本公演はリトルクラシックのメンバーで、バスバリトン歌手の境信博氏とメゾソプラノ歌手の須永尚子氏が、主に演出を手がけた。曲の長さは、最後の質問コーナーも併せて60分の授業時間枠に納まるようにした。

この公演の始まる一時間前に、高学年約20名に集めて、30分程のワークショップを実施した。オペラ中に子供達が登場する箇所を4カ所つくり、その練習をした。30分という短い練習時間でできることは限られていたが、声楽家と一緒に進んだり、簡単な台詞を言ってもらったり、パーティーに参加しているお客様役になり、音楽に合わせて「乾杯!」の動作をしてもらうなど、子供達にオペラの節々に登場できるシーンを設けた。保護者や先生方やワークショップに参加できなかった児童も、自分達の仲間がプロの音楽家に交じって舞台上上がるのを見て、とても嬉しそうだった。声楽家や器楽奏者も時折、客席にも入り込んだりして、ステージ側と観客席側とに一体感ができていた。

### ② 視覚的補助を使った音楽劇

①メンデルスゾーン「真夏の夜の夢」

②プロコフィエフ

「ロミオとジュリエット」

③ウェーベルン 「弦楽三重奏」

これらは、音楽が表現しているお話や背景を、映像や人形を使って、音楽と一緒に観てもらうことにより、ストーリーをわかりやすくすると共に、目でも楽しみながら観客の想像性により訴えかけることを目的とした例である。

①と②は、シェークスピアの劇に後世の作曲家がインスピレーションを得て、音楽をつけたものである。演奏者がナレーションや台詞を加え、45分の授業時間内に納まるように(実際は楽器紹介や他の曲も演奏するので、この曲にあてられた時間は30分程度)台本を作り、映像や人形はアートデザイナーやイラストレーターに依頼した。

③は、12音技法で書かれたウェーベルンの抽象的な音楽を聴いた子供たちが、そこから得たインスピレーションを元に、感じたことを絵に表現してもらった。描かれた絵は、その後行なわれた「子どもと聴こう20世紀の音楽」コンサートで、演奏中にスクリーンに映し出した。子供達の空想の世界によって、大人達の現代曲を聴く聴き方も変わった瞬間だった。

### ③ 編曲を用いた解説

① コーブラント

ピアノ四重奏曲 (1950年)

② チャイコフスキー 「ピアノトリオ」

上記のオペラや、劇音楽を使った例と異なり、ここでは他の芸術(劇/文学/視覚芸術など)と結びついていない絶対音楽を取り上げた。

① では、コーブラントのピアノ四重奏曲で用いられている作曲の手法(複数の調を同時に使う、音に高低差をつける、変拍子にする)を誰しもが知っている「Happy Birthday」の曲で使い、曲がどのように変化するか聴いてもらった。コーブラントがどんな“味付け”をして音楽をつくられているか、馴染みのある曲を使いながら紐解いた。

② では、木管楽器を紹介する4年生を対象とした授業だったので、フルートとファゴット奏者に原曲のヴァイオリンとチェロのパートを演奏してもらった。アウトリーチコンサートでは、クライアントからの要望や、グループのメンバー構成に

よって、しばしばこのようにアレンジ曲を演奏することが多い。オリジナルの編成で原曲を聴いてもらうのがベストだが、その曲を聴く機会がなくなってしまうより、編曲でも聴く機会を創出した方がよいと考える。

この授業では「変奏曲」についてをエントリーポイントとした。4年生の教科書に載っている「とんび」をテーマにした3つの変奏曲をつくり、夫々の変奏では、どのような変化が、どのようなことによってもたらされたか聴き取ってもらった。それをもって、その後聴くチャイコフスキーのトリオの、テーマと変奏を、聴き取るためのアクティビティとした。

#### ④ 子供達と演奏者の即興演奏

- ①「日本の民謡」
- ②バルトーク「44のデュオ」より「蚊の踊り」「Ruthenian Dance」
- ③加藤泰徳「マジック・ミュージック」

ここでは、子供達が演奏家と一緒に即興演奏をした例を挙げた。

- ① では、4人の立候補者が演奏家と共演をした。ある特定の音列（五音階）を限定して、その中の音を自由を選んで即興するというものだった。4人に夫々、「春のうた」「中華ふう」「さくら」「沖縄ふう」の4つの違う題材を与え、ピアニストの音を聴いて感じまを、音にしてもらった。4人の即興をメドレーにし、自分達のオリジナル曲を作った。
- ② は、バルトークの曲を聴いてもらうための、エントリーポイントとして使ったアクティビティである。バルトークのピアノ曲「ミクモコスモス」3巻86番は、左右で違う五音（右はハ長調、左は嬰へ長調の最初の5音）の組み合わせで出来ている。2人の生徒にその音列を使って、即興演奏をしてもらった。バルトークの音の世界を体感してもらった。子ども達のしぐさに注目してもらいたい。
- ③ の曲は、チェリストでもある加藤氏に作品を委嘱。ワークショップとコンサートを連携させたプログラムの中で初演した。子供達がある音列の音を自由に使って鉄琴や木琴、打楽器で演奏者と一緒に演奏した。
- ②の①で取り上げた「真夏の夜の夢」も、即興演奏が行なわれている例である。実はストーリー中、メンデルスゾーンが書いた曲以外で、効果音をピアノで添えている場所が随所にある（妖精が魔法をかけている場面、逃げたり追いかけていたりしている場面、ろばに変えられてびっくりしているところなど）。こ

れは楽譜になっておらず、ピアニストが即興的に演奏した。

### III 結び

クラシックの音楽会の形式は、変遷する社会と共に多様化している。人気の潮流に迎合せず、また従来の方法に縛られることなく、社会との接点をつくり、聴衆のニーズに応じた様々な新しい手法を用いた音楽会をつくること、今後も多くの聴衆にライブ音楽を聴いてもらうためには重要だと考える。

そのためには、本研究課題であった「ティーチングアーティストの技能開発」が、今後も不可欠であり、「ティーチングアーティストの職能を明確」にし、大学における人材育成やキャリア教育としてカリキュラムに反映させ、次世代の音楽界をリードする若い演奏家が、未来のティーチングアーティストとして育つ環境整備をしていかなければならない。

### IV 今後の課題

観客が能動的に関われる音楽会を組み立てる中で、従来から必要だとされていた演奏技術の他に、演奏家は様々なスキルを身につけていかなければいけないことが明らかになってきた。その中でも、即興演奏の技術を身につけることは、演奏家自らの音楽性を高めるだけでなく、聴衆を音楽に効果的に取り込むことができ、彼らの創造性を高めることにつながると感じた。

特徴的な例としては、④で挙げたような観客が演奏者と一緒に即興で演奏するコンサートである。即興演奏は音楽経験の有無に関係なく、だれしもが参加できるので、長時間の練習を積むことなく、他者と一緒に音楽を楽しむことができる。そして、音楽家側は、仮に享受者が音楽の初心者でも、彼らが作り出す音に瞬時反応し、それを引き立てて、一つのかたちにまとめる即興演奏力を有すれば、より効果的な音楽会をつくるのが可能となる。研究者は、教育的なワークショップをしたり、観客（子供達）が即興演奏をして、演奏家と一緒に音楽をすることをコンサートに取り入れているので、自身の即興演奏のレベルを高めることは、聴衆の楽しみに直結すると痛感している。

また、③の例でも明らかになったように、既存の曲に装飾を加えたり、別のスタイルに編曲したり、様々な楽器編成のためにアレンジするなどの、作曲のスキルを高めることは、質の高いアウトリーチの具現と正比例する。

今後は、クラシック演奏家がどのように即興/作曲技能を習得できるか、その学習法と指導法を研究し、それを広く発信することにより、音楽界の活性化の一助となれるように努めたい。

#### <引用文献>

<sup>1</sup> ティーチングアーティストであり、現在は

パークリー音楽大学の弦楽器科主任として活躍するワレス氏の著書 (Wallace, David. Reaching Out: A Musician's Guide to Interactive Performance, New York: McGraw-Hill, 2008) には、双方向コミュニケーションの先導的事例が豊富に挙げられている。

<sup>2</sup> アートエデュケーションの第一人者であるブース氏による定義 (Booth, Eric. The Music Teaching Artist's Bible. New York: Oxford University Press, 2009, pg. 3.)

「エントリーポイント」については、3章11節に詳しく記されている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

大類朋美、「社会における音楽家の新しい役割とスキルについての一考察：第 18 回 NETMCO(NYC)会議の講演者・主催者の事例の紹介を通して」洗足論叢、査読無、第 42 号 2014, 1-14.

[学会発表] (計 2 件)

大類朋美、須永尚子「小学校でのアウトリーチ実践報告と大学におけるティーチング・アーティスト養成教育の可能性」第 2 回 SeMEES フォーラム 2012 年 9 月 8 日洗足学園音楽大学

大類朋美他「アウトリーチ活動を考える～地域社会と大学の協働・協創～」第 3 回 SeMEES フォーラム 2013 年 11 月 9 日洗足学園音楽大学

[図書] (計 1 件)

久保田慶一、大類朋美、スタイルノート「英語でステップアップ：音楽留学で役立つ英会話 50 シーン」2014, 全 352.

[その他]

ホームページ等

<http://littleclassic.jpn.org>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

大類朋美 (OHRUI, Tomomi)

洗足学園音楽大学・音楽学部・講師

研究者番号：80587999

(2) 研究分担者

無

(3) 連携研究者

無